

マムシが取り持っきのこの縁

日本特用林産振興会 顧問 古川 久彦

マムシときのこの縁とは妙な取り合わせと思うかも知れないが、私にとっては忘れられない因縁があるので思い出しながら書くことにした。

二日酔いの頭痛を我慢して研究室へ出るも大文字山への走行を強いられた

それは、院生の頃の話である。アルバイトで少し纏ったお金が入ると、親しい友人たちを誘いあって街角の屋台店で一杯飲むのが通例になっていた。この晩も、珍しく少し厚めの財布を握って何時もの友人たちと楽しく飲んでいて、飲むほどに酔うほどに、時はすでに夜半を過ぎていた。かなり酩酊していたが足どりは堅く、下宿に帰って床についたことは憶えている。翌朝、二日酔いの頭痛を我慢して研究室へ出ることにした。勢いに任せて、最後に飲んだカストリ焼酎が効いたらしい。こんな状態で実験が出来るわけがない。私は呆然として机に向かっていて。運がない時とは、こんなものであろうか。そこへ突然浜田先生が入ってきて、“古川、お前はそこで何しているんや”という。人情味には溢れていても、学問には殊のほか厳しい先生である。私が二日酔いの態である事を見抜いていた。“馬鹿者めが！、少しばかりの酒で酔っ払うとはだらしがないぞ！、なんだその情けない姿は！、大文字山へ走って行って来い！”と大きな声で怒鳴られた。

大文字山は京都の東山連峰の一角を占め

る低山で、銀閣寺の裏手奥に在って夏には大文字焼きで賑わうことで全国に知られている。また、京都市民にとっても身近な山として馴染の深い山でもある。銀閣寺の坂道を通り抜けるとそれほど急な坂もなく、大学からゆっくり歩いて登っても1時間足らずで頂上に達するので、散歩のつもりで気楽に登れる山である。私は、言われるままに勢いよく教室を飛び出して大文字山へ向かった。通り慣れた道ではあるが、走って登るのは初めてである。途中、息切れがして何度も何度も休んでは、漸くにして頂上に辿り着いた。そこで汗を拭いながら一服。眼下に広がる京都市街は、近代的ビルの合間から古式豊かな寺院が見える。そして、新緑が際立って美しく眼につく。なんて緑の多い街だろう。ここは、古都というよりも新旧混在の都という方が適切かもしれない。

路傍の隅の切り株に見つけた1本のエノキタケをとろうとすると

汗も納まったので立ち上がってふと見ると、路傍の隅にある古い切り株に1本のエノキタケが生えている。この時期にエノキタケとは珍しいと思いながら手にとった瞬間、身の毛もよだつ思いでゾーとした。なんと切り株の直ぐ傍らにヘビがとぐろを巻いているではないか。よく見ると、背に鮮やかな銭型の模様がある。紛れもなくマムシである。傍らに落ちていた枯れ枝を拾い上げて、叩こうとしたその時である。私の気配に気が付いたマムシ

は、突如として差し出した枯れ枝をめがけて飛びついてきた。驚いた私はとっさに身をくつがえして横に逃げた。目標を見失ったマムシは、そのまま音をたてて路面に落ちた。そして、鎌首を持ち上げて私を目掛けて追いかけて来るではないか。私は逃げた。10メートルも走っただろうか。振り返ると、もうマムシの姿は見えなかった。研究室へ戻ってその話をすると、皆が立ち上がって大笑いした。そして、マムシのお陰で二日酔いが治ったかと冷やかされたが、当の私は暫く胸の高まりが治まらなかった。この時に採ったエノキタケは分離・培養して F-162 の記号で保存し、時折の実験材料に使っていたが、今はもう手許には無い。

芦生演習林でのマムシの思い出

マムシといえば、他にも幾つかの思い出がある。その一つは芦生演習林でのことである。京都の北西部、福井県と滋賀県との県境の近くに、京都大学の芦生演習林がある。麓の事務所からさらに 10 キロメートルほどの山奥に学生実習用の宿舎、長治谷小屋(今は長治谷作業所)がある。この付近は人類未踏の原生林が残っていて、きのこの採集地としては申し分のない所である。ここに隣接した一角に皆伐地があって、植林されてはいるがまだ植栽木は小さく、殆んど灌木や雑草で覆われている。そして所々に切り株があり、岩石や小さな崩壊地が露出している。そのために日当たりがよく適度の湿度もあって、いかにもマムシが好みそうな場所である。夏の頃ここを通ると、ここにもいた、あそこにもいると言うほどに、7~8 匹のマムシに出会うことは稀ではない。故意に足音を立てるとマムシは驚いた気配もなく落ち着いた速さで逃げ出すが、やがて石の間や切り株の陰に身を隠すと、やおら鎌首を持ち上げてこちらに向かって威嚇する。つまりわが身に危険を感じるときは逃げの体制をとるが、一旦身の安全が保てると

今度は逆に攻撃に転ずるという野生動物本来の姿がここでも見ることが出来て、怖さを感じずの反面自然界の摂理を垣間見る一面もあった。

山の作業員は危険を顧みずに見つけたマムシを生け捕りにする。持ち帰ったマムシは焼酎に漬けてマムシ酒を造るそうだが、中にはその場で解体して骨付きのまま焼いて食べたり、あるいは乾燥し粉末にして精力剤として利用しているという。面白いことに、マムシの目玉(眼球)だけを取り出して生のまま飲み込んでいる人がいた。聞くと、これを飲むと視力が回復するという。真偽の程は解らないが、これも古くからの言い伝えによるものであろう。

九州でのマムシの思い出は生々しい

これと似た事が九州の熊本市にもあった。事実私が体験した事である。宮崎県の鹿川で発生したシイタケの病害調査で疲れきって町に下りたら、友人が絶対元気になるからと言って案内してくれたのがなんとマムシ屋だった。店に入ると、どれにしますか？と店の主人がいう。カウンターの横に置かれた小型水槽の中には、大小さまざまなマムシがうごめいている。大きなのをと言うと特大の物挟みでマムシを無造作に取り出し、まな板に載せてまず頭を切り落とした。切り落とした頭は皿にのせて客の方に向けて置かれた。客によっては面白半分に指でその頭を突く輩がいるらしく、危険だからそれは絶対にしないでくれと店の主人は注意してくれる。そして滴る血を杯に受けて、これを飲めと言う。これには一瞬躊躇したが、絶対の精力回復剤だという友人の声に励まされて一気に飲み乾した。味など分かる余裕はなかったが、ただ生臭い臭いがしたことだけは憶えている。肉は薄く削いでワサビ醤油で食べたが、味は淡泊。残りはこんがり焼いて塩味で出してくれた。芳ばしい香りがして特に抵抗はなかった。

ある時、京大芦生演習林の宿舎で同宿した京都府立大の昆虫学の先生は、調査の帰りに大きな青大将(アオダイショウ)を生け捕りにして持ち帰り、皮を剥いだ生のまま5 cm程の長さに切って皿に盛り、わさび醤油で食べていた。絶対の精力剤だからと言って勧められたが、さすがにこれには手をつけることが出来なかった。

マムシの怖さを忘れられることもある

確か1954年の秋だったと思う。私は単身で芦生演習林の事務所が在る美山町から佐々里峠を越えて広河原まで歩いたことがあった。今は車道が開いて便利になったと聞いているが、当時は殆ど人が通ることも無いけもの道同様の山道であった。そして、この一帯には原生林が残っていて、途中にはツキノワクマの棲息地があり、またマムシの原もあると言うので、出発の前夜には事務所の職員から細かな注意を受けていた。この話を聞いて正直なところ単身踏破の意志はやや鈍ったが、それでも思い翌朝意を決して出発した。言われた通りに腰には熊避けの鈴をつけ、手には頑丈な杖を持って歩き始めたが、鬱蒼とした原生林の中で荒れ果てた小道を辿るのが精一杯で、まして何時熊に出会うのかとそればかりが気掛かりで、きのこを探す余裕などはなかった。峠の頂に近づいた頃だと思ふ。小道の真ん中に生々しい熊の糞があるのを見てからは、怖さのあまり震えが止まらず、走るようにして峠を駆け下りたことを今でもよく憶えている。美山町を出てから広河原に着くまでの約4時間、マムシの原のことも気にはなっていたが、この時は熊の怖さに押されてマムシの怖さを忘れてしまっていたようである。きのこ調査の度に何時も付き纏うマムシとの縁が、この時ばかりは無縁だったことは奇遇であつたと思っている。

マムシの棲息地としてもう一つ思い出すのは、和歌山県紀伊半島・古座川の奥地にあ

る北海道大学の演習林である。ここの一角に足を踏み入れると、一足毎にマムシがとぐろを巻いているのに出会った事がある。秋の日差しの強い日であつたこともあつて、マムシは気持ちよく日光浴をしていたのだろう。足音がしても逃げようとしなかった。道案内をしてくれた作業員の一人は、1ヶ月前にマムシに噛みつかれて酷い目にあつたというので怨念は人一倍強く、マムシを見つけると太い棒で叩き殺していた。

きのこことマムシの間に因果関係がある!?

大文字山も芦生も、また古座川も、何れもきのこの宝庫である。そして、きのこの最盛期といえば秋である。さらに秋はマムシの繁殖期で、この時期のマムシはとくに凶暴だという。その上きのこが良く発生する場所は、マムシも棲みやすいようである。このように考えると、きのこことマムシとの間には何か因果関係があるのではないかと、そんな余分なことを想像したりしている。私の採集歴の中に、これ程までにマムシとの出会いが多いのは一体何故なのだろうか。この謎は未だに解けなくっている。

(注:学術研究および実地研修を目的として開設された京都大学芦生演習林は、2003年4月、フィールド科学教育研究センターの発足に伴って、森林ステーション・芦生研究林と改称されている。)(2008/08/18)